

**取組実績の概要** 【2ページ以内】

本プログラムの特徴は、2・3回生時に日中韓の学生が3カ国のキャンパスを移動しながら学ぶ「移動キャンパス」及びその事前・事後学習であり、「次世代人文学リーダー」に相応しい語学・人文学・コミュニケーションの能力を有する人材を育成することにある。そのため、学部生を対象とした4年一貫の国際高等教育プログラムを構築し、その安定的運営を支える三大学合同の体制及び各大学の体制を構築した。構想調書に記した内容・目標を達成するために、準備も含めて5年をかけて関連する学内外部署や教職員と力を合わせ取り組んだ。

**1. 組織**

【三大学】三大学教職員合同会議（最高議決組織）を年3回のペースで開催し、事業内容・運営について討議を行った。その下に各大学の教育運営に直接携わる教職員からなる実務者会議を設置し、遠隔会議システムを使って適宜開催した。隔年で広東外大と東西大に職員を派遣し、学内組織や設備・支援体制を確認する研修を行い、職員間の相互交流を図った。【学内】文学部教授会の下部に副学部長・東洋研究学域（現・東アジア研究学域）所属の教員・事務長等からなる運営委員会を設置し、教育・事務に直接携わる教職員による事務局会議をほぼ毎週実施した。中国語・朝鮮語のネイティブ教師や本プログラムの専属職員を雇用した。【運営評価】学外有識者をメンバーとする外部評価委員会を設置し、平成25年度～27年度に授業見学会・学生懇談会・年度評価等を実施した。各年度末には事務局員で内部評価を行い、翌年の運営に反映させた。

**2. 設備・環境整備**

【教育】外的整備として本プログラム専用の共同研究室「キャンパスアジア・カフェ」と中国語・朝鮮語のネイティブ教師が常駐する「キャンパスアジア事務室」を開設した。内的整備として本プログラムの概要をまとめた「学びの手引き」を作成して開始とともに学生に配布した。学生のコミュニケーションやリーダーシップ能力を測る「到達度アンケート」を開発し、その結果を学生毎にまとめ、フィードバック資料として活用した。最終年度には4年間を振り返る学生インタビューを実施した。HPでは3カ国の学生がブログを執筆し、日常的な情報発信を行った。また学内の複言語教育・国際教育の研究者による本プログラムの学びを検証する組織が発足し、教育効果についての研究が開始された。

【情報管理】三大学教職員メーリングリストや、本事業に関わる書類・情報をWeb上で共有・管理できるeRoomシステムを構築し、シラバス・履修登録・成績確認を一元化したWebシステム「キャンパスアジアポータルサイト」を開発した。

**3. 学生交流とカリキュラム****【移動キャンパス】****①1学期：中国学期（毎年2～4月派遣、於広東外大）**

（平成25年度）現地教員による各種中国語授業・中国社会文化研究等の人文科目や、各国の歴史に関する授業を遠隔システムと教員の現地派遣を併用して通年開講した（本学は日本史入門を1～3学期通年開講）。キャリア形成として、世界遺産フィールドワーク・在広州日本国領事館での三大学学生交流会・日本語学校訪問・广汽トヨタ社企業見学等を実施した。（平成26年度）中国地域研究・中国文学選読等の人文科目や三大学が共通テーマで授業を行う共同開講科目「東アジア文化講義」を開講した。（海外インターンシップ）国際的会計事務所・人材派遣会社・江西財經大日本語学科・環境保護関連企業で実施した。

**②2学期：日本学期（毎年5～8月受入、於本学）**

（平成25年度）日本学生対象の履修ガイダンスや中国・韓国学生対象のオリエンテーションを実施し（平成26年度も同様）、キャンパスアジア日本研究・日本文化講義、小集団演習等の人文科目を開講した。京都・西陣にある国際シェアハウスを借上げ、三大学学生の自主管理による共同生活を行った（平成26年度も同様）。中国・韓国学生は、本学一般学生とのランゲージ・エクステンション、東洋研究学域1回生や現代東アジア言語・文化専攻学生との交流会に参加した。東日本大震災被災地研修で宮城・岩手県沿岸部を訪問し、現地視察や復興に携わる自治体職員・外国人の講演会を実施した。（平成26年度）小集団演習や日本の文化・社会に関する人文科目を開講し、現代中国研究等の一般学生用の既存科目も履修可能にした。キャリア形成プログラム（ビジネスマナー・ビジネス日本語・日本企業グローバル戦略論等の導入講義を開講し、東アジアリーディング企業による企業講演会「ワーキングアジア」やインターンシップ等の研修を行う）を実施した。中国・韓国学生は、課外活動団体（能楽部・茶道部等）との交流会に参加した。（海外インターンシップ）6月～7月頃にインターンシップ事前プログラムを受講した後、8月頃に企業・自治体（京都市・メーカー・新聞社・書店・観光ホテル等）でインターンシップを実施した。

**③3学期：韓国学期（毎年9～12月派遣、於東西大）**

（平成25年度）各種朝鮮語授業・韓国文化の理解・韓国社会研究・歴史文化探訪・演習等の人文科目を開講した。また、韓国キャンパスアジア10事業団による学生ワークショップや国際人文文化祭典へ参加した。（平成26年度）各種朝鮮語授業と韓国地域研究・韓国文学の理解・演習等の人文科目を開講した。また世界人文学フォーラム等に参加した。（海外インターンシップ）通信会社現地法人・IT企業・メーカー等でインターンシップを実施した。

**【移動キャンパスのための派遣前学習と派遣後学習】****①移動キャンパス派遣前学習（平成24年度）**

（前期：パイロット候補学生の育成）学生募集のための説明会やオリエンテーションを複数回開催し、中国語・朝鮮語のネイティブ教師による「語学カフェ」で語学力を鍛えながらパイロット候補学生を選抜した。（夏季）3カ国のパイロット候補学生と一緒に3カ国のキャンパスを1週間ずつ回り、翌年の「移動キャンパス」の模擬体験とプログラムへのモチベーションを上げる「オリエンテーション・ショートステイ」を実施した。（後期：パイロット学生選抜）キャンパスアジアのための語学・演習等の必修授業を開講し、実際に派遣するパイロット学生を選抜した。履修等に関するオリエンテーションを複数回開催し、立命館平和ミュージアム研修を実施した。（冬季）パイロット学生を対象に、さらなる語学力の鍛錬のため短期語学研修（中国・韓国）を実施した。

## ②移動キャンパス派遣後学習(平成27年度)

キャンパスアジア日本研究・専門外国語で修得した能力を内面化させ、卒業論文や成果発表等の作成に繋げた。リーダーズフォーラム「日中韓キャンパスアジアでの学びとその可能性」を日本で実施し、本プログラムの学びの特徴を学生が紹介し、国際教育等を専門とする教員により学問的な分析を加えた教育効果について発表が行われた。三大学合同修了式・リーダーズフォーラムを実施し(中国)、3カ国の卒業論文優秀者が母国語以外で内容を口頭発表し、卒業論文の要旨をそれぞれの学生が3カ国語で記した卒業論文集を発行した。

## 【移動キャンパス以外の大学院生・学部生交流】

遠隔システムを利用した「日・韓・中連携講座」を開講し(平成23年度後期～27年度後期)、夏期には日本で集中講義を、春期には中国・韓国で集中講義を実施し学生を派遣した(中国：平成23・25・27年度、韓国：平成24・26年度)。またTA養成プログラム(韓国へ派遣：平成24・27年度)、創新プログラム(中国から受入：平成27年度)、キャンパスアジア特別留学派遣(中国へ派遣：平成27年度)、DMDP等で留学プログラムを実施し、学部生・院生の派遣・受入を行った。

## 4. 情報公開・成果発信

【WEB】本プログラムのホームページ・ブログ・FaceBookページの作成、プログラム紹介動画を作成し、YouTubeで配信した。【紙媒体】年度別報告集・最終年度報告集・AO入試用パンフレット・学内情報誌・学生新聞「CAP新聞」を作成した。【イベント】キックオフカンファレンス(平成24年度)・キャンパスアジア特別講義(講師は平成24年度：姜萬吉氏、平成25年度：金文京氏)、国際フォーラム「アジアの未来を切り拓く人材育成を目指して」(平成26年度)、リーダーズフォーラム「日中韓キャンパスアジアの学びとその可能性」(平成27年度)、三大学合同修了式におけるリーダーズフォーラム(平成27年度)を開催した。【学外団体との交流・報告】岡山大学・名古屋大学のキャンパスアジア事業団との情報交換会・学生交流会、SGH運営高校との交流会・模擬授業(立命館宇治高校・同守山高校・鳥羽高校)、立命館大学高大連携プログラムでプログラム紹介を行った。その他、大学改革支援・学位授与機構シンポジウム・東アジア共同体評議会会合・日本外国語教育推進機構等でプログラム内容の報告を行った。

## 5. OB・OGによる同窓会の活動

「日・韓・中連携講座」のOB・OGによる同窓会の発足式が平成25年8月に実施されて以降、第1回(平成26年7月、日本)、第2回(平成27年2月、韓国)が開催された。平成28年1月には三大学合同修了式に合わせて第3回(中国)が開催され、本講座の受講生・パイロット学生・平成28年度開始の常設化プログラムの中国学生が一堂に会し、世代をつなぐ東アジアネットワークの礎を築くことができた。

## 6. 目標の達成状況及び補助期間終了後の展開

平成28年3月にパイロット学生10名が卒業し、日中韓の学生30名が平成28年1月に広東外大での三大学合同修了式にて共同修了証書を手にした。彼らは2・3回生時に3カ国のキャンパスで共に学び共に暮らす「移動キャンパス」を経験した。現地語で現地の人文学を学んだ彼らの語学力は、日本学生8名については中国語・朝鮮語ともに検定試験の最上～上級レベルに達し、トリリンガルになることに成功した。またシェアハウス等の宿舍や授業で修得したコミュニケーション能力は極めて実践的で、異文化間の調整能力が求められるグローバル人材としても申し分ないといえる。日本学生10名は文学部の様々な専攻に属しながら全員が東アジアに関わるテーマで卒業論文を執筆した。中国・韓国でも卒業論文を執筆し、30名の学生は卒論要旨を3カ国語で記し母語以外の言葉で発表を行った。進路・就職に関しては、大学院進学・海外大学での日本語講師等の人文学分野での国際交流に携わる道を選んだ学生や、外資系・日系のグローバル企業、商社、金融、多様な人々の交流を創り出す広告・イベント会社等、民間企業に就職した学生もいた。本プログラムの内容・運営・教育での実績は、上記の通り目的を達成している。本プログラムで構築した運営体制を基礎としながら、平成28年4月から毎年各国から20名の学生を移動キャンパスに派遣するキャンパスアジア常設化プログラムを運営する。三大学は常設化プログラムに向けた合意書(平成24年7月)と協定書(平成27年1月)に調印し、具体的な制度設計を議論し体制を構築してきた。広東外大では平成27年9月入学生、東西大では平成28年3月入学生、本学では同4月入学生に対し常設化プログラムの教学を開始している。今後も3カ国で緊密に連携し合いながら、互いの信頼関係を生かし、引き続き安定したプログラム運営を行っていく。また、本プログラムで構築した先進的な国際高等教育プログラムから生み出される日中韓の人との繋がりや様々な恩恵を、キャンパスアジア・プログラム生だけでなく、より多くの学生・人々が享受できるような波及効果を生み出せるよう尽力していく。

## 【本事業における交流学生数の計画と実績】

	平成23年度		平成24年度		平成25年度		平成26年度		平成27年度		合計	
	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入
計画※	30人	0人	40人	60人	40人	65人	40人	65人	30人	55人	180人	245人
実績	16人	0人	70人	74人	66人	51人	43人	53人	29人	83人	224人	261人

※海外相手大学を追加している場合は、追加による交流学生数の増加分を含んでいる。